

近ごろ思うこと 教育としての「英語」

岡野 哲

最近『大学英語教育学会創立 40 周年記念誌』を送って頂いた。その中で、私に関わったのは、支部での研究会を別にすれば、第 32 回（1993）大会で、定年退職者の小講演を引き受けたことだけである。その時聴講して下さった小池会長の質問に答えて、「死ぬまで英語教師をやる積りです」と云う様な大見えを切ったのを覚えている。恥ずかしい事ながら、この発言は空手形になる運命にあった。65 歳で北大での非常勤講師の年限が切れると、本務である北海学園での仕事は講義と演習に限られて、英語の授業を担当する事ができなくなった。以来、英語教師を自称することが憚られる思いでいる。

幸いな事に、支部の談話分析研究会はメンバーの真摯な熱意のお蔭で、毎月一度づつの研究会を続けて数年を経ている。この間、メンバー夫々は個別の研究発表を行なってきたが、研究会として公刊した文献は高等学校オーラル・コミュニケーション A 検定教科書（19 種）の分析（2000 年）である。その後、新しい指導要領によって改訂された教科書が用いられているので、現状について語ることはできないが、「オーラル・コミュニケーション」という科目にふさわしい教科書が編纂されているかを談話分析の立場から考察すると、中途半端なものが致命的に多すぎるという感想を免れなかった。例えば、電話の掛け方を取り上げるのはよいが、何の用事で、誰に掛けるかによって、一律に論じられない筈である。また、通話の終了させ方を全く扱っていない教科書が殆どなのは驚きであった。これは、ほんの一例で、表現の幅が著しく狭められ、動詞の過去形を使うシチュエーションが、一部を除いて考慮されていないのは、教育上にも大きな問題であると思われた。

英語に限らず、言葉で何を伝えるかが人々の最大の関心事の筈である。その視点に立てば、自分が置かれている現在の状況にしか感心を向けられないような また、そのような態度をコミュニケーションを通じて相手に感じさせるような 人間は、決して尊敬されることがないだろう。瞬間々々の用件を片付け、刹那の欲求を満足させる能力ないし技能しか身につけていない人間を育てることに終始するならば、その営みは教育とは呼べないだろう。学生も、上級の生徒も、その事に気づいているだろう これは教育ではないと。まさに成人になろうとしている若い世代が求めている多様な目標を大きく括るならば、それは「よい教育」ではないだろうか。その意味で、分析対象としてコミュニ

ケーション A の教科書はあまり教育的とは云えなかったのである。

さて、英語教育に対する批判的な風潮は、日本の英語教育史を顧みると、今に始まったことではないのは明かである。役に立たないという批判は百年も前から云われ続けてきたのである。考えてみると、「教室」という隔離された特別なシチュエーションの中で、無限に変化して止まない「一般社会」の個別のニーズに完全に対応できるような訓練をやり遂げることは不可能な話である。世間にはそれができると思う幻想がある。しかも、必要な条件の整備を施さずに、徒らに教育課程を操作し、教師を鞭打つばかりの教育行政のあり方を問題にする声は聞こえてこないのである。行政の罪の大きさは、「談話」として英語を学ばせるという立場に立てば一層明かである。

それでは、英語教育は無益なものに終わるのだろうか。そうならない様に大学英語教育学会が払ってきた献身的な努力は大いに敬意を払うに値すると思う。しかし、片々区々たる技術上の論議は細心の人間的配慮と同じではない。大局的見地に立って、人間教育の一環としてこの英語教育の事業を推進する事が肝要であると信ずるのである。「教育とは子供の本来もっている能力を引き出し、育てることだ」と云われて久しい。五十数年前、敗戦国日本を占領し、軍国主義教育を改めさせようとして軍政部の米人指導者の口から繰り返し聞かされた言葉であった。彼らが云う民主主義教育ばかりでなく、戦前戦中の軍国主義教育の中でも、教育である限り、児童生徒の発達する力を伸ばそうとする営みが無かった訳ではない。いずれにせよ、問題は児童生徒にある潜在的能力とは何か、どの能力を伸ばせばよいかという課題に帰着するであろう。この点について自らに問うとき反省すべき事の多さに気づく。

しかし、反省をこめて確認するならば、どんな児童生徒も、ヒトである以上は<ことば>を話すのである。この能力をどの様に引き出し、伸ばしてゆけばよいか　しかも、<ことば>を英語とする能力を伸ばしてゆけばよいか、それが問題である。自明の事ながら、学校教育において、教室は主要なコミュニケーションの中心的な場である。ただ、教室においては、コミュニケーションの下位機能がある：INSTRUCTION, TRAINING, COACHING, QUESTIONING, RESPONDING, FOLLOW-UP,などがある。これらの下位機能をもって構成されるコンフィギュレーションの総体が教室でのコミュニケーションである。そして、それらの下位過程のすべてにおいて、教育の場にふさわしい　教室という特殊な社会的場面に適合した　コミュニケーションを成り立たせることが理想である。

この様な理想的な図式が具現化されるには、物理的な条件整備だけでは充分ではない。コース全体を通じての教師と生徒学生とのエクスチェンジではなく、個別の人格をもった人間相互の一回限りのエクスチェンジである。生徒学生は

一個の人間として多様な内面を宿している。教師が彼らとこの様な関係を取り結ぶことができるためには、単なる技術を越えた、人間としての感化力がなければならぬ。この事を強く感じるこの頃である。

しかし、それと同時に、半世紀の教壇生活を反省してみると、自分に感化力があるように思うのは錯覚か、自己満足に過ぎないかも知れない。生徒学生との年齢が近い時期には、拙い授業でも生徒学生と比較的よい関係を保つことができた。また、晩年になると、年齢的な距離が大きくなり、その事が却って自然に平穏な状況を生み出してくれたかも知れない。その中間の時期が教室での仕事が重荷に思われた頃であった。自ら努力して工夫を重ねないと、学生を引きつける授業を続けることが難しかった。そして、教室技術とでも云うべき方法の知識を探ろうと試みたのも、その時期であった。時には、嬉しい反応が学生から戻ってきて、満足感を味わった。時には、意図が伝わらずに反撥を買い、これと闘わなければならなかった。そして、その時期こそ、〈ことば〉の教育としての「英語」に最も心を砕いた年月であった。

それは、〈ことば〉が対人的コミュニケーションだけではない、内面の心の動き 対自己コミュニケーション (INTRAPERSONAL COMMUNICATION) を前提にしていることを原理として、授業の中で学生の心の中に〈ことば〉の動きを惹起するための工夫を凝らすことであった。〈ことば〉が 英語としての〈ことば〉が 聴覚・視覚・運動感覚を含む能動的な活動として学生に自覚される事を、どれほど願ったか知らない。しかし、その願いを果たすことができなかつたことは、冒頭で言及した通りである。